

**主要な経営指標等の推移**

主要な経営指標等の推移（連結）	19
主要な経営指標等の推移（単体）	20

**連結情報**

2018年度の業績等の概要	21
連結財務諸表	22

**単体情報**

財務諸表	31
損益の状況	36
預金業務	38
貸出金業務	40
国際業務・内国為替業務・証券業務・その他	42
デリバティブ取引	45
株式状況	46
バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示	47
報酬等に関する開示事項	58

**(独立監査人による監査について)**

当行は、会社法第396条第1項の規定に基づき2017年度及び2018年度の財務諸表並びに連結財務諸表についてEY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき2017年度及び2018年度の財務諸表並びに連結財務諸表についてEY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。

# 主要な経営指標等の推移

## ■ 主要な経営指標等の推移（連結）

(単位：百万円)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
連結経常収益	8,938	9,514	9,037	9,367	9,022
連結経常利益	1,209	1,458	1,014	526	777
親会社株主に帰属する当期純利益	970	1,329	731	391	259
連結包括利益	2,024	341	△90	1,468	297
連結純資産額	20,818	20,916	20,586	21,821	21,888
連結総資産額	455,917	460,485	449,190	464,824	470,561
1株当たり純資産額 (円)	472.16	475.46	465.10	504.83	507.03
1株当たり当期純利益金額 (円)	28.32	39.94	20.96	10.19	5.94
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	22.07	30.33	16.60	9.09	6.03
自己資本比率 (%)	4.56	4.54	4.58	4.69	4.65
連結自己資本比率 (国内基準) (%)	8.56	8.56	8.58	8.14	7.70
連結自己資本利益率 (%)	4.86	6.36	3.52	3.68	1.18
連結株価収益率 (倍)	—	—	—	—	—
営業活動によるキャッシュ・フロー	7,273	388	10,660	4,780	5,724
投資活動によるキャッシュ・フロー	△5,863	△637	△10,277	22,308	9,055
財務活動によるキャッシュ・フロー	△270	△242	△239	△233	△230
現金及び現金同等物の期末残高	17,456	16,965	17,109	43,964	58,513
従業員数 (人) 〔外、平均臨時従業員数〕	520 〔95〕	499 〔84〕	497 〔77〕	488 〔77〕	457 〔82〕

- (注) 1. 当行及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
 2. 自己資本比率は、(期末純資産の部合計－期末非支配株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。  
 3. 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく2006年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

## ■ 主要な経営指標等の推移（単体）

(単位：百万円)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
経常収益	8,827	9,399	8,936	9,285	8,927
経常利益	1,202	1,442	1,009	534	764
当期純利益	963	1,313	726	400	247
資本金	7,300	7,300	7,300	7,300	7,300
発行済株式総数 (千株)	普通株式 31,800 A種優先株式 6,000	普通株式 31,800 A種優先株式 6,000	普通株式 31,800 A種優先株式 6,000	普通株式 31,800 A種優先株式 6,000	普通株式 31,800 A種優先株式 6,000
純資産額	20,723	21,046	20,684	21,803	21,836
総資産額	455,715	460,286	448,973	464,630	470,350
預金残高	423,113	429,633	423,574	426,966	427,790
貸出金残高	316,724	319,603	301,597	307,375	307,373
有価証券残高	119,904	117,683	124,519	102,051	90,493
1株当たり純資産額 (円)	469.11	479.61	468.23	504.25	505.35
1株当たり配当額 (円) (内1株当たり中間配当額)	普通株式 5.00 (-) A種優先株式 14.20 (-)	普通株式 5.00 (-) A種優先株式 13.84 (-)	普通株式 5.00 (-) A種優先株式 12.84 (-)	普通株式 5.00 (-) A種優先株式 12.28 (-)	普通株式 3.00 (-) A種優先株式 12.36 (-)
1株当たり当期純利益金額 (円)	28.10	39.45	20.81	10.48	5.54
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	21.88	30.05	16.50	9.29	5.73
自己資本比率 (%)	4.54	4.57	4.60	4.69	4.64
単体自己資本比率 (国内基準) (%)	8.51	8.56	8.59	8.14	7.70
自己資本利益率 (%)	4.84	6.29	3.48	1.88	1.13
株価収益率 (倍)	—	—	—	—	—
配当性向 (%)	17.79	12.67	24.02	47.70	54.15
従業員数 (人) 〔外、平均臨時従業員数〕	516 〔94〕	496 〔82〕	495 〔74〕	486 〔73〕	455 〔76〕

- (注) 1. 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
 2. 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。  
 3. 自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく2006年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

## ■ 2018年度の業績等の概要

### (金融経済環境)

当期における国内経済を顧みますと、企業収益は高い水準にあるものの改善に足踏みがみられ、企業の業況判断はおおむね横ばいとなっております。設備投資は引き続き増加し、また雇用・所得環境の着実な改善が続く中で、個人消費は持ち直しているほか、住宅投資はおおむね横ばいとなっております。公共投資は弱含み、海外への輸出はこのところ弱含み、輸入はおおむね横ばいとなっております。

先行きについては、当面、一部に弱さが残るものの、雇用・所得環境の改善が続く中で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復に向かうことが引き続き期待されます。

当行グループの主たる営業基盤である福井県内経済においては、製造業の生産は緩やかに拡大しており、全体では緩やかに持ち直しつつあります。設備投資も製造・非製造業ともに増加見込みで、個人消費は緩やかに拡大しつつあります。公共投資は前年を上回り、住宅投資は緩やかに回復しております。なお雇用情勢は着実に改善しており、人手不足感が強まっております。

先行きについては、雇用・所得環境の改善が続く中で、各種政策の効果で、景気が緩やかに拡大していくことが期待されますが、通商問題の動向、海外景気の不確実性、人手不足が企業活動に与える影響などに引き続き留意する必要があります。

### (経営方針)

#### (1) 会社経営の基本方針

当行グループは、「地域社会への貢献」・「健全なる経営」・「活力ある職場」という経営理念のもと、お客様との継続的なつながりと信頼に基づき、付加価値のある金融サービスを通じてお客様に喜びをお届けすることで、地域・お客様・当行の発展につなげてまいります。

#### (2) 基本戦略

顧客ニーズにより深く対応することを目的とした「課題解決型提案営業」の深化により中小規模事業者から「頼られる銀行」となること、また顧客目線の金融・情報提供サービスを通じて、企業・家計の経済活動を支援すること、この事業性取引と個人取引を地域経済の活性化のための両輪として捉え、「地域のお客さまとともに成長する銀行」を目指す銀行像として掲げて展開してまいります。

基本戦略として「地域密着の徹底」を継続して掲げ、「福邦の心」にある「お客様第一」に基づき、地域のお客さまに対して①信頼され（収益力による自己資本積上げ）②相談され（成長志向・専門性のある行員の活躍）③成長を支える（スピードある解決提案）ことで福井県内のシェアを高めていくことを目指してまいります。

### (連結ベースの業績)

このような環境下、当行及び連結子会社1社は「地域密着の徹底～相談しやすく親しみやすい銀行～」を基本戦略として、役職員一体となって積極的に業務に取組んだ結果、業績は次のとおりとなりました。

主要勘定につきましては、預金は、法人預金及び公金預金の増加により、期末残高は前期末比8億27百万円増加して、4,276億16百万円となりました。

また、貸出金は、消費者ローンが減少したことにより、期末残高は前期末比38百万円減少して、3,076億5百万円となりました。

有価証券につきましては、リスク管理と効率運用に努め、期末残高は前期末比115億58百万円減少して901億24百万円となりました。

損益状況につきましては、有価証券売却益が減少した影響等により、前期比3億45百万円減少の90億22百万円となりました。また、経常費用は、経費および有価証券売却損の減少等により、前期比5億96百万円減少して82億45百万円となりました。

その結果、経常利益は前期比2億51百万円増加し、7億77百万円となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益については、経常利益は増加したものの新勘定系システム構築費用の発生等により、前期比1億32百万円減少の2億59百万円となりました。

連結キャッシュ・フローにつきましては、営業活動によるキャッシュ・フローは、譲渡性預金の増加による流入額の増加を主因に前期比9億44百万円増加して、57億24百万円となりました。投資活動によるキャッシュ・フローは有価証券の取得による支出が増加したことを主因に前期比132億53百万円減少して、90億55百万円となりました。財務活動によるキャッシュ・フローは前期比2百万円増加し、△2億30百万円となりました。全体で現金及び現金同等物の期末残高は、前期比145億49百万円増加して、585億13百万円となりました。

## ■ セグメント情報等

### セグメント情報

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

### 関連情報

2017年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）

#### 1. サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	5,124	3,307	935	9,367

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

#### 2. 地域ごとの情報

##### (1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の100%であるため、記載を省略しております。

##### (2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の100%であるため、記載を省略しております。

##### 3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

2018年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）

#### 1. サービスごとの情報

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	5,099	3,002	920	9,022

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

#### 2. 地域ごとの情報

##### (1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の100%であるため、記載を省略しております。

##### (2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の100%であるため、記載を省略しております。

##### 3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

## ■ 連結貸借対照表

### 資産の部

科目	2017年度 (2018年3月31日)	2018年度 (2019年3月31日)
現金預け金	43,984	58,533
有価証券	101,682	90,124
貸出金	307,644	307,605
外国為替	210	498
その他資産	8,970	10,189
有形固定資産	4,758	4,800
建物	1,087	1,124
土地	2,931	2,897
リース資産	151	104
建設仮勘定	240	0
その他の有形固定資産	347	672
無形固定資産	385	1,193
ソフトウェア	343	1,156
リース資産	4	0
その他の無形固定資産	37	37
支払承諾見返	434	233
貸倒引当金	△3,246	△2,617
資産の部合計	464,824	470,561

### 負債及び純資産の部

科目	2017年度 (2018年3月31日)	2018年度 (2019年3月31日)
<b>(負債の部)</b>		
預金	426,789	427,616
譲渡性預金	—	4,000
債券貸借取引受入担保金	11,150	12,802
その他負債	2,525	1,860
賞与引当金	251	251
退職給付に係る負債	929	902
役員退職慰労引当金	194	184
睡眠預金払戻損失引当金	84	60
利息返還損失引当金	0	0
偶発損失引当金	58	60
繰延税金負債	149	267
再評価に係る繰延税金負債	435	433
支払承諾	434	233
負債の部合計	443,002	448,673
<b>(純資産の部)</b>		
資本金	7,300	7,300
資本剰余金	6,256	6,256
利益剰余金	6,558	6,592
自己株式	△236	△237
株主資本合計	19,878	19,911
その他有価証券評価差額金	1,310	1,327
土地再評価差額金	793	789
退職給付に係る調整累計額	△161	△139
その他の包括利益累計額合計	1,942	1,976
純資産の部合計	21,821	21,888
負債及び純資産の部合計	464,824	470,561

## ■ 連結損益計算書及び連結包括利益計算書

### 連結損益計算書

科目	2017年度 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
<b>経常収益</b>		
資金運用収益	9,367	9,022
貸出金利息	6,005	6,036
有価証券利息配当金	4,359	4,240
コールローン利息及び買入手形利息	1,624	1,773
預け金利息	0	0
預け金利息	20	21
その他の受入利息	0	0
役員取引等収益	1,181	1,189
その他業務収益	1,385	1,001
その他経常収益	795	795
株式等売却益	101	77
貸倒引当金戻入益	543	628
償却債権取立益	0	0
その他の経常収益	149	88
<b>経常費用</b>		
資金調達費用	8,841	8,245
預金利息	166	109
譲渡性預金利息	157	99
コールマネー利息及び売出手形利息	—	0
その他の支払利息	0	0
役員取引等費用	8	9
役員取引等費用	873	846
その他業務費用	1,544	974
営業経費	5,679	5,653
その他経常費用	578	662
株式等売却損	0	102
株式等償却	55	21
その他の経常費用	522	537
経常利益	526	777
<b>特別利益</b>		
固定資産処分益	59	—
<b>特別損失</b>		
固定資産処分損	34	387
減損損失	—	32
システム解約違約金	34	38
システム解約違約金	—	316
税金等調整前当期純利益	551	390
法人税、住民税及び事業税	17	42
法人税等調整額	141	88
法人税等合計	159	130
当期純利益	391	259
非支配株主に帰属する当期純利益	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	391	259

### 連結包括利益計算書

科目	2017年度 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
<b>当期純利益</b>		
391	259	
<b>その他の包括利益</b>		
1,076	38	
その他有価証券評価差額金	952	16
退職給付に係る調整額	124	21
<b>包括利益</b>		
1,468	297	
<b>(内訳)</b>		
親会社株主に係る包括利益	1,468	297
非支配株主に係る包括利益	—	—

## ■ 連結株主資本等変動計算書

2017年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,300	6,256	6,382	△235	19,704
当期変動額					
剰余金の配当			△233		△233
親会社株主に帰属する当期純利益			391		391
自己株式の取得				△0	△0
土地再評価差額金の取崩			16		16
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	175	△0	174
当期末残高	7,300	6,256	6,558	△236	19,878

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	358	810	△285	882	20,586
当期変動額					
剰余金の配当					△233
親会社株主に帰属する当期純利益					391
自己株式の取得					△0
土地再評価差額金の取崩					16
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	952	△16	124	1,059	1,059
当期変動額合計	952	△16	124	1,059	1,234
当期末残高	1,310	793	△161	1,942	21,821

2018年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	7,300	6,256	6,558	△236	19,878
当期変動額					
剰余金の配当			△229		△229
親会社株主に帰属する当期純利益			259		259
自己株式の取得				△1	△1
土地再評価差額金の取崩			4		4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	34	△1	33
当期末残高	7,300	6,256	6,592	△237	19,911

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	1,310	793	△161	1,942	21,821
当期変動額					
剰余金の配当					△229
親会社株主に帰属する当期純利益					259
自己株式の取得					△1
土地再評価差額金の取崩					4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	16	△4	21	34	34
当期変動額合計	16	△4	21	34	67
当期末残高	1,327	789	△139	1,976	21,888

## ■ 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	2017年度 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	551	390
減価償却費	347	421
減損損失	34	38
貸倒引当金の増減 (△)	△774	△629
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△3	△0
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△124	△27
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	11	△10
睡眠預金払戻損失引当金の増減額 (△は減少)	11	△23
偶発損失引当金の増減額 (△は減少)	△19	1
資金運用収益	△6,005	△6,036
資金調達費用	166	109
有価証券関係損益 (△)	△51	△135
借入金の純増減 (△)	△800	—
固定資産処分損益 (△は益)	△59	32
貸出金の純増 (△) 減	△5,773	38
預金の純増減 (△)	3,377	827
譲渡性預金の純増減 (△)	—	4,000
債券貸借取引受入担保金の純増減 (△)	11,150	1,651
外国為替 (資産) の純増 (△) 減	1,095	△288
外国為替 (負債) の純増減 (△)	△0	—
資金運用による収入	6,055	6,121
資金調達による支出	△255	△153
その他	△4,134	△566
<b>小 計</b>	<b>4,799</b>	<b>5,760</b>
法人税等の支払額	△18	△36
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>4,780</b>	<b>5,724</b>
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有価証券の取得による支出	△79,130	△94,968
有価証券の売却による収入	88,835	95,909
有価証券の償還による収入	13,260	9,452
有形固定資産の取得による支出	△580	△712
無形固定資産の取得による支出	△152	△624
有形固定資産の売却による収入	76	32
固定資産の除却による支出	—	△34
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>22,308</b>	<b>9,055</b>
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
自己株式の取得による支出	△0	△1
配当金の支払額	△233	△229
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>△233</b>	<b>△230</b>
<b>現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)</b>	<b>26,854</b>	<b>14,549</b>
<b>現金及び現金同等物の期首残高</b>	<b>17,109</b>	<b>43,964</b>
<b>現金及び現金同等物の期末残高</b>	<b>43,964</b>	<b>58,513</b>

## 注記事項 (2018年度)

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

- 連結の範囲に関する事項
  - 連結子会社 1社  
福邦カード株式会社
  - 非連結子会社  
該当ありません。
- 持分法の適用に関する事項
  - 持分法適用の非連結子会社  
該当ありません。
  - 持分法適用の関連会社  
該当ありません。
  - 持分法非適用の非連結子会社  
該当ありません。
  - 持分法非適用の関連会社  
該当ありません。
- 連結子会社の事業年度等に関する事項  
連結子会社の決算日は次のとおりであります。  
3月末日 1社
- 会計方針に関する事項
  - 商品有価証券の評価基準及び評価方法  
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。
  - 有価証券の評価基準及び評価方法
    - 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。  
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
    - 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
  - デリバティブ取引の評価基準及び評価方法  
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
  - 固定資産の減価償却の方法
    - 有形固定資産(リース資産を除く)  
当行の有形固定資産は、定率法(ただし、1998年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。  
また、主な耐用年数は次のとおりであります。  
建物：3年～50年  
その他：2年～20年  
連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。
    - 無形固定資産(リース資産を除く)  
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年～11年)に基づいて償却しております。
    - リース資産  
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
- 貸倒引当金の計上基準  
当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。  
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。  
破綻懸念先の債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができざる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。  
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。  
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、審査管理部署が査定結果を検証し、当該部署から独立した監査部署が査定結果を監査しております。  
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は770百万円です。  
連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。
- 賞与引当金の計上基準  
賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

- 役員退職慰労引当金の計上基準  
役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払に備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。
- 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準  
睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について預金者からの払戻請求に基づく払戻損失に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。
- 利息返還損失引当金の計上基準  
利息返還損失引当金は、連結子会社1社が利息制限法の上限金利を超過する貸付金利息の返還請求に備えるため、過去の返還実績等を勘案し、返還見込額を合理的に見積もり計上しております。
- 偶発損失引当金の計上基準  
偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
- 退職給付に係る会計処理の方法  
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については期間定額基準によっております。また、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。  
数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から損益処理
- 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準  
当行の外貨建資産・負債については、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。
- 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲  
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金、預入期間が3か月以内の預け金及び日本銀行への預け金であります。
- 消費税等の会計処理  
当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
  - 「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)
- 概要  
収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。  
ステップ1：顧客との契約を識別する  
ステップ2：契約における履行義務を識別する  
ステップ3：取引価格を算定する  
ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する  
ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する
  - 適用予定日  
2022年3月期の期首より適用予定であります。
  - 当該会計基準による影響  
影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

- 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	108百万円
延滞債権額	9,378百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。  
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

- 貸出金のうち、3か月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
3か月以上延滞債権額	一百万円

なお、3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

- 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	2,656百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものであります。

# 連結情報

4. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
合計額	12,143百万円

- なお、上記 1. から 4. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
合計額	4,474百万円

6. 担保に供している資産は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産	12,802百万円
有価証券	12,802百万円
計	12,802百万円

担保資産に対応する債務	
債券貸借取引	12,802百万円
受入担保金	

為替決済、資金決済、地方公共団体収納代理取引、日銀共通取引あるいはデリバティブ取引に係る担保として、次のものを差し入れております。

	2018年度 (2019年3月31日)
預け金	10百万円
有価証券	4,515百万円
その他資産	4,890百万円

また、その他資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
保証金	94百万円

7. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	57,555百万円
うち契約残存期間が1年以内のもの	52,959百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

8. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。再評価を行った年月日  
1999年3月31日  
同法律第3条第3項に定める再評価の方法  
土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第3号に定める土地課税台帳に登録されている価格に基づいて、実行価格補正等合理的な調整を行って算出。  
同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

	2018年度 (2019年3月31日)
減価償却累計額	1,564百万円

9. 有形固定資産の減価償却累計額

	2018年度 (2019年3月31日)
減価償却累計額	4,657百万円

10. 有形固定資産の圧縮記帳額

	2018年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額	152百万円
(当連結会計年度の圧縮記帳額)	(一百万円)

(連結損益計算書関係)

1. その他の経常費用には次のものを含んでおります。

	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
貸出金償却	5百万円

2. 営業経費には次のものを含んでおります。

	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
給料・手当	2,478百万円
退職給付費用	113百万円

3. 当行グループは、以下の資産グループについて減損損失を計上しております。当連結会計年度において、廃止に関する意思決定を行った当行の営業用店舗及び地権が継続的に下落し、割引前キャッシュ・フローの総額が帳簿価額に満たないこと等により投資額の回収が見込めなくなった当行の資産グループの帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額38百万円を減損損失として特別損失に計上しております。

場所	主な用途	種類	減損損失 (百万円)
福井県内	営業用店舗 3カ所 遊休資産 1カ所	土地及び建物等	18
福井県外	営業用店舗 2カ所	土地及び建物等	19
		合計	38

当行は、管理会計上の最小区分である営業店単位でグルーピングを行っております。当連結会計年度の減損損失の測定に使用した回収可能額は、正味売却価額により測定しており、当行の担保評価基準にて合理的に算定しています。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	2018年度 (2018年4月1日から2019年3月31日まで)
その他有価証券評価差額金	297百万円
当期発生額	△252百万円
組替調整額	44百万円
税効果調整前	27百万円
税効果額	16百万円
その他有価証券評価差額金	16百万円
退職給付に関する調整累計額	△9百万円
当期発生額	31百万円
組替調整額	21百万円
税効果調整前	—
税効果額	21百万円
退職給付に関する調整累計額	38百万円
その他の包括利益合計	38百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	2018年度 (2019年3月31日)				摘 要
	当連結会計年度期首株式数	当連結会計年度増加株式数	当連結会計年度減少株式数	当連結会計年度末株式数	
発行済株式					
普通株式	31,800	—	—	31,800	
A種優先株式	6,000	—	—	6,000	
合 計	37,800	—	—	37,800	
自己株式					
普通株式	605	4	—	610	(注)
A種優先株式	—	—	—	—	
合 計	605	4	—	610	

(注) 自己株式の普通株式の株式数の増加 4千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決 議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	155	5.00	2018年3月31日	2018年6月28日
	A種優先株式	73	12.28	2018年3月31日	2018年6月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決 議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年6月27日 定時株主総会	普通株式	93	利益剰余金	3.00	2019年3月31日	2019年6月28日
	A種優先株式	74	利益剰余金	12.36	2019年3月31日	2019年6月28日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
現金預け金勘定	58,533百万円
預入期間が3ヵ月超の定期預け金	△20百万円
現金及び現金同等物	58,513百万円

(リース取引関係)

ファイナンス・リース取引  
所有権移転外ファイナンス・リース取引

- ①リース資産の内容  
(ア) 有形固定資産  
主として、器具及び備品であります。  
(イ) 無形固定資産  
ソフトウェアであります。  
②リース資産の減価償却の方法  
連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項  
(1) 金融商品に対する取組方針  
当行グループは、貸出・有価証券投資等の銀行業務を中心とした金融サービス事業を行っております。これらの事業を行うため、主として一般顧客からの預金によって資金調達を行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、内在するリスク量を把握・検討のうえ適正な水準にコントロールするために、当行では、資産及び負債の総合的管理（以下「ALM」という。）を行っております。当行の連結子会社の中に、クレジットカード業務及び信用保証業務を行う子会社があります。

- (2) 金融商品の内容及びそのリスク  
当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。また、当行が保有する有価証券は、主として株式、債券、投資信託及び出資金等であり、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。金融負債で主なもの、一般顧客からの預金であり、金利の変動リスクや予期せぬ資金流出がもたらす資金調達に係る流動性リスクに晒されております。デリバティブ取引は、有価証券関連取引では債券先物取引、債券オプション取引及び株価指数先物取引、通貨関連取引では先物為替予約取引であり、これらは信用リスク、金利の変動リスク及び市場価格の変動リスクに晒されております。

- (3) 金融商品に係るリスク管理体制  
①信用リスクの管理  
当行グループは、当行の貸出業務に関する諸規程及び信用リスク管理規程等に従い、貸出金について、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、保証や担保の設定、問題債権への対応などと与信管理に関する体制を整備しております。これらの与信管理は各営業店のほか融資部により行われ、信用リスクに関する事項を、定期的に経営会議に報告しております。さらに、与信管理の状況については、監査室がチェックしております。有価証券の発行体の信用リスクについては、証券国際部において、信用情報や時価の把握を定期的にを行うことで管理しております。

- ②市場リスクの管理  
1. 金利リスクの管理  
当行は、取締役会において決定された「市場リスク管理方針」等に基づき、金利リスクを管理しております。具体的には、ALM委員会において、金融資産及び金融負債の運用、調達金利や期間を把握し、ギャップ分析や金利感応度分析等を行うことにより、金利リスクを適切に管理しております。なお、金利リスクの管理状況については、定期的に経営会議等に報告しております。

2. 為替リスクの管理  
当行は、取締役会において決定された「市場リスク管理方針」等に基づき、為替リスクを管理しております。具体的には、証券国際部において直先総合持高等のポジションを適切に管理しております。なお、直先総合持高の管理状況については、定期的に経営会議等に報告しております。

3. 価格変動リスクの管理  
当行は、取締役会において決定された「市場リスク管理方針」等に基づき、有価証券に係る価格変動リスクを管理しております。具体的には、証券国際部において、有価証券投資に関する各種限度額等を設定し、日次での遵守状況を適切に管理しております。なお、各種限度額等の遵守状況については、定期的に経営会議等に報告しております。

4. デリバティブ取引  
当行は、取締役会において決定された「市場リスク管理方針」等に基づき、デリバティブ取引によって生じる市場リスクを管理しております。具体的には、証券国際部において、デリバティブ取引に関する各種限度枠等を設定し、日次での遵守状況を適切に管理しております。なお、各種限度枠等の遵守状況については定期的に経営会議等に報告しております。

5. 市場リスクに係る定量的情報  
当行では、保有する有価証券に関して、VaRの手法を用いて、分散共分散法を採用し市場リスク量を算出しております。VaRとは、将来の一定期間（保有期間）に、ある一定の可能性の範囲内（信頼水準）で生じ得る最大損失額を統計的に推計した指標であり、また、分散共分散法とは、マーケットが正規分布に従って変動するとの仮定に基づいてVaRを計測する方法をいいます。VaR計測の前提条件は、保有期間120日、信頼水準99%、観測期間5年として計測しております。2019年3月31日現在の有価証券における市場リスク量は、2,423百万円であります。また、貸出金及び預金等の金利変動の影響を受ける金融商品（有価証券を除く）に関するVaRの算出においても、分散共分散法を採用しております。VaR計測の前提条件は、保有期間1年、信頼水準99%、観測期間5年として月次で計測しており、流動性預金についてはコア預金内部モデルを採用しております。2019年3月31日現在の預貸の金利リスク量は、△1,551百万円であります。

なお、当行では有価証券に使用するVaRモデルについて、VaRと日次損益を比較するバックテストを実行し、有効性を検証しております。ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。この為、VaRを補完するために、市場急変時を想定したストレステスト等を実施するなど、市場リスクについて多面的な分析を実施しております。

③資金調達に係る流動性リスクの管理

当行は、取締役会において決定された「流動性リスク管理方針」等に基づき流動性リスクを管理しております。具体的には、証券国際部において、流動性準備量等の資金管理を日次で適切に実施しております。また、資金調達手段の多様化に取り組みなど、緊急事態に備えた金融市場での資金調達のための体制構築にも努めております。

- (4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明  
金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることもあります。  
2. 金融商品の時価等に関する事項  
連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。ただし、外国為替、その他資産、その他負債については、重要性が乏しいと認められるため、注記を省略しております。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません（(注2) 参照）。

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1) 現金預け金	58,533	58,533	—
(2) 有価証券	—	—	—
満期保有目的の債券	—	—	—
その他有価証券	89,664	89,664	—
(3) 貸出金	307,605	—	—
貸倒引当金（※1）	△2,496	—	—
	305,109	312,283	7,174
資産計	453,306	460,481	7,174
(1) 預金	427,616	427,628	12
(2) 債券貸借取引受入担保金	12,802	12,802	—
負債計	440,419	440,431	12
デリバティブ取引（※2）	—	—	—
ヘッジ会計が適用されていないもの	(0)	(0)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(0)	(0)	—
デリバティブ取引計	(0)	(0)	—

(※1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。  
(※2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( ) で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

- (1) 現金預け金  
満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、預入期間が短期（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。  
(2) 有価証券  
株式は、取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。  
(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、信用リスク等のリスクを将来キャッシュ・フローに反映させて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。約定期間が長期にわたる貸出金においては、期限前償還リスクは考慮していません。また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けないものについては、返済見込み期間及び金利利率等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負 債

- (1) 預金  
要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしております。また、定期性預金の時価は、預金の種類及び一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。預入期間が長期のものにおける期限前解約率は考慮していません。  
(2) 債券貸借取引受入担保金  
債券貸借取引受入担保金は、約定期間が短期間（1年以内）であるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産 (2) その他有価証券」には含まれておりません。

区 分	2018年度 (2019年3月31日)
①非上場株式（※1）	342
②その他の証券（※2）	117
合 計	459

(※1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。  
(※2) その他の証券のうち、市場価格がなく、将来のキャッシュ・フローが約定されていないものは、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
現金預け金	58,533	—	—	—	—	—
有価証券						
その他有価証券のうち	7,593	25,346	17,273	4,695	13,873	3,900
満期があるもの						
うち国債	2,000	7,800	600	—	1,700	1,000
地方債	—	—	—	—	1,200	—
社債	4,316	8,474	2,295	700	4,668	1,600
貸出金(*)	134,097	74,009	30,009	13,979	10,688	7,967
合 計	200,223	99,356	47,283	18,675	24,561	11,867

(\*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めないもの13,274百万円、期間の定めのないもの23,579百万円は含めておりません。

(注4) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	361,956	34,539	3,361	6	0	—
債券貸借取引受入担保金	12,802	—	—	—	—	—
合 計	374,759	34,539	3,361	6	0	—

(\*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当行は、退職給付制度として、確定給付企業年金規約型企業年金制度及び退職一時金制度を採用しています。

連結子会社においては、退職一時金制度を設けており、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

区 分	金額 (百万円)
退職給付債務の期首残高	2,194
勤務費用	119
利息費用	—
数理計算上の差異の発生額	△27
退職給付の支払額	△174
退職給付債務の期末残高	2,112

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

区 分	金額 (百万円)
年金資産の期首残高	1,265
期待運用収益	37
数理計算上の差異の発生額	△37
退職給付の支払額	△116
事業主からの拠出額	60
年金資産の期末残高	1,210

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

区 分	金額 (百万円)
積立型制度の退職給付債務	2,112
年金資産	△1,210
902	
非積立型制度の退職給付債務	—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	902

区 分	金額 (百万円)
退職給付に係る負債	902
退職給付に係る資産	—
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	902

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

区 分	金額 (百万円)
勤務費用	119
利息費用	—
期待運用収益	△37
数理計算上の差異の費用処理額	31
確定給付制度に係る退職給付費用	113

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

区 分	金額 (百万円)
未認識数理計算上の差異	21
合計	21

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

区 分	金額 (百万円)
未認識数理計算上の差異	△139
合計	△139

(7) 年金資産に関する事項

①年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	27.51%
株式	37.34%
現金及び預金	—
その他	35.15%
合計	100%

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率は、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

- ①割引率 0.00%
- ②長期期待運用収益率 3.00%
- ③予想昇給率 —

(ストック・オプション等関係)

該当ありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生した原因別の内訳

	2018年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産	
貸倒引当金	825百万円
退職給付に係る負債	271百万円
減価償却超過額	105百万円
有価証券償却	236百万円
税務上の繰越欠損金(注)	1,235百万円
その他	809百万円
繰延税金資産小計	3,485百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	△1,235百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△1,960百万円
評価性引当額小計	△3,196百万円
繰延税金資産合計	289百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△554百万円
その他	△2百万円
繰延税金負債合計	△557百万円
繰延税金資産(負債)の純額	△267百万円

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金(*)	486	0	346	16	307	78	1,235
評価性引当額	△486	△0	△346	△16	△307	△78	△1,235
繰延税金資産	—	—	—	—	—	—	—

(\*) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(表示方法の変更)

「[税効果会計に係る会計基準]の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過措置に従って記載しておりません。

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳  
当連結会計年度において、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

- イ 当該資産除去債務の概要  
当行の一部の店舗は、設置の際に土地所有者との事業用定期借地権契約や不動産賃貸契約を締結しており、賃借期間終了による原状回復義務に対して資産除去債務を計上しております。また、一部の店舗等に使用されている有害物質を除去する義務に対しても資産除去債務を計上しております。

- ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法  
使用見込期間は当該契約の期間若しくは建物の減価償却期間(5年～40年)と見積もり、割引率は使用見込期間に見合う国債の流通利回り(0.44%～2.29%)を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
期首残高	46百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	14百万円
時の経過による調整額	0百万円
資産除去債務の履行による減少額	△14百万円
期末残高	47百万円

(1株当たり情報)

	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
1株当たり純資産額	507.03円
1株当たり当期純利益金額	5.94円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	6.03円

(注) 1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	2018年度 (2019年3月31日)
1株当たり純資産額	
純資産の部の合計額	21,888百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	6,074百万円
うち優先株式の払込金額	6,000百万円
うち定時株主総会決議による優先配当額	74百万円
普通株式に係る期末の純資産額	15,814百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	31,189千株

	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
1株当たり当期純利益金額	
親会社株主に帰属する当期純利益	259百万円
普通株主に帰属しない金額	74百万円
うち定時株主総会決議による優先配当額	74百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	185百万円
普通株式の期中平均株式数	31,191千株

潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	74百万円
優先配当額	74百万円
普通株式増加数	11,833千株
優先株式	11,833千株
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	—

(重要な後発事象)

該当ありません。

# 単体情報

## ■ 貸借対照表

### 資産の部

(単位：百万円)

科目	2017年度 (2018年3月31日)	2018年度 (2019年3月31日)
<b>現金預け金</b>	43,984	58,533
現金	6,339	5,464
預け金	37,644	53,068
<b>有価証券</b>	102,051	90,493
国債	23,241	13,813
地方債	798	1,214
社債	21,323	22,313
株式	2,555	2,881
その他の証券	54,132	50,270
<b>貸出金</b>	307,375	307,373
割引手形	5,214	4,474
手形貸付	18,081	16,541
証書貸付	259,960	262,858
当座貸越	24,118	23,498
<b>外国為替</b>	210	498
外国他店預け	210	498
<b>その他資産</b>	8,538	9,724
前払費用	19	14
未収収益	361	288
金融派生商品	55	11
その他の資産	8,102	9,410
<b>有形固定資産</b>	4,757	4,799
建物	1,087	1,124
土地	2,931	2,897
リース資産	151	104
建設仮勘定	240	0
その他の有形固定資産	346	671
<b>無形固定資産</b>	385	1,193
ソフトウェア	343	1,156
リース資産	4	0
その他の無形固定資産	36	36
<b>支払承諾見返</b>	434	233
<b>貸倒引当金</b>	△3,107	△2,499
<b>資産の部合計</b>	<b>464,630</b>	<b>470,350</b>

### 負債及び純資産の部

(単位：百万円)

科目	2017年度 (2018年3月31日)	2018年度 (2019年3月31日)
<b>(負債の部)</b>		
<b>預金</b>	426,966	427,790
当座預金	12,418	12,417
普通預金	157,818	170,941
貯蓄預金	1,387	1,365
通知預金	1,309	1,423
定期預金	244,296	232,836
定期積金	8,878	7,966
その他の預金	856	839
<b>譲渡性預金</b>	—	4,000
<b>債券貸借取引受入担保金</b>	11,150	12,802
<b>その他負債</b>	2,334	1,669
未払法人税等	53	71
未払費用	328	242
前受収益	255	230
従業員預り金	271	285
給付補填備金	2	3
金融派生商品	67	11
リース債務	186	129
資産除去債務	46	47
その他の負債	1,121	646
<b>賞与引当金</b>	250	250
<b>退職給付引当金</b>	768	762
<b>役員退職慰労引当金</b>	194	184
<b>睡眠預金払戻損失引当金</b>	84	60
<b>偶発損失引当金</b>	58	60
<b>繰延税金負債</b>	149	267
<b>再評価に係る繰延税金負債</b>	435	433
<b>支払承諾</b>	434	233
<b>負債の部合計</b>	<b>442,826</b>	<b>448,514</b>
<b>(純資産の部)</b>		
<b>資本金</b>	7,300	7,300
<b>資本剰余金</b>	6,256	6,256
資本準備金	6,256	6,256
<b>利益剰余金</b>	6,378	6,400
利益準備金	361	407
その他利益剰余金	6,017	5,993
繰越利益剰余金	6,017	5,993
<b>自己株式</b>	△236	△237
<b>株主資本合計</b>	19,699	19,719
<b>その他有価証券評価差額金</b>	1,310	1,327
<b>土地再評価差額金</b>	793	789
<b>評価・換算差額等合計</b>	2,104	2,116
<b>純資産の部合計</b>	<b>21,803</b>	<b>21,836</b>
<b>負債及び純資産の部合計</b>	<b>464,630</b>	<b>470,350</b>

## ■ 損益計算書

(単位：百万円)

科目	2017年度 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
<b>経常収益</b>	9,285	8,927
資金運用収益	5,991	6,024
貸出金利息	4,345	4,228
有価証券利息配当金	1,624	1,773
コールローン利息	0	0
預け金利息	20	21
その他の受入利息	0	0
役員取引等収益	1,100	1,107
受入為替手数料	282	283
その他の役員収益	817	823
その他業務収益	1,385	1,001
商品有価証券売却益	3	2
国債等債券売却益	1,381	999
その他経常収益	808	794
株式等売却益	101	77
貸倒引当金戻入益	556	629
償却債権取立益	0	0
その他の経常収益	149	87

(単位：百万円)

科目	2017年度 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2018年度 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
<b>経常費用</b>	8,751	8,163
資金調達費用	163	106
預金利息	157	99
譲渡性預金利息	—	0
コールマネー利息	0	0
その他の支払利息	6	7
役員取引等費用	854	833
支払為替手数料	53	53
その他の役員費用	801	779
その他業務費用	1,544	974
国債等債券売却損	1,376	699
外国為替売却損	167	156
金融派生商品費用	—	116
その他の業務費用	—	0
営業経費	5,611	5,587
その他経常費用	576	660
貸出金償却	5	5
株式等売却損	0	102
株式等償却	55	21
その他の経常費用	515	530
<b>経常利益</b>	534	764
<b>特別利益</b>	59	—
固定資産処分益	59	—
<b>特別損失</b>	34	387
固定資産処分損	—	32
減損損失	34	38
システム解約違約金	—	316
<b>税引前当期純利益</b>	559	377
<b>法人税、住民税及び事業税</b>	16	41
<b>法人税等調整額</b>	141	88
<b>法人税等合計</b>	158	130
<b>当期純利益</b>	400	247

## ■ 株主資本等変動計算書

2017年度（2017年4月1日から2018年3月31日まで）

(単位：百万円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	
当期首残高	7,300	6,256	6,256	314	5,879	6,194
当期変動額						
剰余金の配当				46	△279	△233
当期純利益					400	400
自己株式の取得						
土地再評価差額金の取崩					16	16
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	—	—	—	46	137	184
当期末残高	7,300	6,256	6,256	361	6,017	6,378

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△235	19,515	358	810	1,168	20,684
当期変動額						
剰余金の配当		△233				△233
当期純利益		400				400
自己株式の取得	△0	△0				△0
土地再評価差額金の取崩		16				16
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			952	△16	935	935
当期変動額合計	△0	183	952	△16	935	1,118
当期末残高	△236	19,699	1,310	793	2,104	21,803



# 単体情報

2018年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）

(単位：百万円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	7,300	6,256	6,256	361	6,017	6,378
当期変動額						
剰余金の配当				45	△275	△229
当期純利益					247	247
自己株式の取得						
土地再評価差額金の取崩					4	4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	—	—	—	45	△24	21
当期末残高	7,300	6,256	6,256	407	5,993	6,400

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△236	19,699	1,310	793	2,104	21,803
当期変動額						
剰余金の配当		△229				△229
当期純利益		247				247
自己株式の取得	△1	△1				△1
土地再評価差額金の取崩		4				4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			16	△4	12	12
当期変動額合計	△1	20	16	△4	12	32
当期末残高	△237	19,719	1,327	789	2,116	21,836

## 注記事項（2018年度）

(重要な会計方針)

- 商品有価証券の評価基準及び評価方法  
商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）により行っております。
- 有価証券の評価基準及び評価方法  
(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は主として移動平均法により算定）、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。  
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。  
(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
- デリバティブ取引の評価基準及び評価方法  
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
- 固定資産の減価償却の方法  
(1) 有形固定資産（リース資産を除く）  
有形固定資産は、定率法（ただし、1998年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。  
なお、主な耐用年数は次のとおりであります。  
建物：3年～50年  
その他：2年～20年  
(2) 無形固定資産（リース資産を除く）  
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年～11年）に基づいて償却しております。  
(3) リース資産  
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
- 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準  
外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。
- 引当金の計上基準  
(1) 貸倒引当金  
貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。  
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下、「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書に記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。  
破綻懸念先の債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができず債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法（キャッシュ・フロー見積法）により計上しております。  
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。  
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、審査管理部署が査定結果を検証し、当該部署から独立した監査部署が査定結果を監査しております。  
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は770百万円です。  
(2) 賞与引当金  
賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。  
(3) 退職給付引当金  
退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については期間定額基準によっております。なお、数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。  
数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理  
(4) 役員退職慰労引当金  
役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当事業年度末までに発生していると認められる額を計上しております。  
(5) 睡眠預金払戻損失引当金  
睡眠預金払戻損失引当金は、利益計上した睡眠預金について預金者からの払戻請求に基づく払戻損失に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。  
(6) 偶発損失引当金  
偶発損失引当金は、信用保証協会との責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見込額を計上しております。
- その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項  
(1) 退職給付に係る会計処理  
退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこの会計処理の方法と異なっております。  
(2) 消費税等の会計処理  
消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産及び無形固定資産に係る控除対象外消費税等は、当事業年度の費用に計上しております。

(貸借対照表関係)

- 関係会社の株式又は出資金の総額  
2018年度  
(2019年3月31日)  
株 式 369百万円
- 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
破綻先債権額 80百万円  
延滞債権額 9,270百万円  
なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和40年政令第97号）第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。  
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。
- 貸出金のうち、3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
3ヵ月以上延滞債権 一百万円  
なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。
- 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
貸出条件緩和債権額 2,656百万円  
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。
- 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
合計額 12,007百万円  
なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。  
6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 平成14年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
4,474百万円
- 担保に供している資産は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
担保に供している  
資産  
有価証券 12,802百万円  
担保資産に対応する  
債務  
債券貸借取引  
受入担保金 12,802百万円  
為替決済、資金決済、地方公共団体収納代理取引、日銀共同取引あるいはデリバティブ取引に係る担保として、次のものを差し入れております。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
預け金 10百万円  
有価証券 4,515百万円  
その他の資産 4,890百万円  
また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
保証金 94百万円
- 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。  
2018年度  
(2019年3月31日)  
融資未実行残高 56,252百万円  
うち契約残存期間が1年以内のもの 52,959百万円  
なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができるとする旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴するほか、契約後も定期的に予め定められている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。
- 有形固定資産の圧縮記帳額  
2018年度  
(2019年3月31日)  
圧縮記帳額 152百万円  
(当事業年度の圧縮記帳額) (一百万円)
- 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額  
2018年度  
(2019年3月31日)  
19百万円

# 単体情報

(有価証券関係)  
子会社株式

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	—	—	—
合計	—	—	—

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式の貸借対照表計上額

	2018年度 (2019年3月31日)
子会社株式	369
合計	369

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	2018年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産	
貸倒引当金損金算入限度超過額	796百万円
退職給付引当金損金算入限度超過額	232百万円
減価償却超過額	105百万円
有価証券償却	236百万円
税務上の繰越欠損金	1,146百万円
その他	807百万円
繰延税金資産小計	3,325百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	△1,146百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△1,889百万円
評価性引当額小計	△3,035百万円
繰延税金資産合計	289百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△554百万円
その他	△2百万円
繰延税金負債合計	△557百万円
繰延税金資産 (負債) の純額	△267百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳  
当事業年度において、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

## ■ 損益の状況

### 国内・国際業務部門別粗利益

(単位: 百万円・%)

	2017年度	2018年度
国内業務部門粗利益	5,842 [1.35]	5,975 [1.40]
資金運用収支	5,559	5,650
役員取引等収支	244	272
その他業務収支	38	52
国際業務部門粗利益	71 [0.39]	243 [0.79]
資金運用収支	268	267
役員取引等収支	1	1
その他業務収支	△198	△24
業務粗利益	5,914 [1.31]	6,218 [1.36]

(注) 1. [ ] は業務粗利益率を表示しております。業務粗利益率 =  $\frac{\text{業務粗利益}}{\text{資金運用勘定平均残高}} \times 100$

2. 国内業務部門は円建取引、国際業務部門は外貨建取引であります。

### 資金運用・資金調達勘定の平均残高、利息、利回り

(単位: 百万円・%)

		2017年度			2018年度		
		平均残高	利息	利回り	平均残高	利息	利回り
国内業務部門	資金運用勘定	447,713 (17,667)	5,734 (10)	1.28	457,620 (31,420)	5,769 (12)	1.26
	うち貸出金	305,877	4,345	1.42	306,689	4,228	1.37
	資金調達勘定	435,584	163	0.03	446,608	106	0.02
国際業務部門	うち預金	426,782	156	0.03	429,506	99	0.02
	資金運用勘定	18,108	268	1.48	30,517	267	0.87
	うち貸出金	—	—	—	—	—	—
国際業務部門	資金調達勘定	18,257 (17,667)	10 (10)	0.06	31,658 (31,420)	12 (12)	0.03
	うち預金	297	0	0.06	133	0	0.12

(注) 1. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高を控除して表示しております。

2. ( ) は国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息 (内書き) であります。

3. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式 (前月末TT仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式) により算出しております。

### 役員取引の状況

(単位: 百万円)

		2017年度	2018年度
国内業務部門	役員取引等収益	1,097	1,104
	うち預金・貸出業務	408	445
	うち為替業務	279	280
	うち証券関連業務	175	127
	うち代理業務	5	5
	役員取引等費用	852	831
国際業務部門	うち為替業務	51	51
	役員取引等収益	3	3
	うち預金・貸出業務	—	—
	うち為替業務	3	3
	うち証券関連業務	—	—
	うち代理業務	—	—
国際業務部門	役員取引等費用	1	2
	うち為替業務	1	2

### 資金利ざや

(単位: %)

		2017年度	2018年度
資金運用利回り	国内業務部門	1.27	1.26
	国際業務部門	1.48	0.87
	合計	1.33	1.31
資金調達原価	国内業務部門	1.30	1.26
	国際業務部門	0.14	0.09
	合計	1.31	1.26
総資金利ざや	国内業務部門	△0.03	0.00
	国際業務部門	1.34	0.78
	合計	0.02	0.05

# 単体情報

## 受取・支払利息の増減

(単位：百万円)

		2017年度			2018年度		
		残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減
国内業務部門	受取利息	48	△349	△300	124	△89	35
	うち貸出金	35	△207	△171	11	△178	△167
	支払利息	2	△74	△71	2	△59	△57
国際業務部門	うち預金	0	△69	△69	0	△58	△57
	受取利息	1	0	1	108	△109	△1
	うち貸出金	—	—	—	—	—	—
国際業務部門	支払利息	0	△4	△3	5	△3	1
	うち預金	0	0	0	0	0	0

## 営業経費の内訳

(単位：百万円)

	2017年度	2018年度
給料・手当	2,508	2,454
退職給付費用	147	123
福利厚生費	31	25
減価償却費	347	421
土地建物機械賃借料	190	195
営繕費	21	21
消耗品費	75	77
給水光熱費	55	54
旅費	13	13
通信費	140	127
広告宣伝費	103	101
租税公課	305	306
その他	1,669	1,664
合計	5,611	5,587

## 業務純益

(単位：百万円)

	2017年度	2018年度
業務純益	364	672

## 利益率

(単位：%)

	2017年度	2018年度
総資産経常利益率	0.11	0.16
資本経常利益率	2.51	3.50
総資産当期純利益率	0.08	0.05
資本当期純利益率	1.88	1.13

(注) 1. 総資産経常(当期純)利益率 =  $\frac{\text{経常(当期純)利益又は損失}}{\text{(期首総資産(除く支払承諾見返)残高+期末総資産(除く支払承諾見返))} \div 2} \times 100$

2. 資本経常(当期純)利益率 =  $\frac{\text{経常(当期純)利益又は損失}}{\text{(期首純資産の部残高+期末純資産の部残高)} \div 2} \times 100$

## 預金業務

### 預金・譲渡性預金残高

#### 1. 期末残高

(単位：百万円・%)

		2017年度		2018年度		
			構成比		構成比	
国内業務部門	預金	流動性預金	172,935	40.50	186,147	43.11
		うち有利息預金	158,588	37.14	158,908	36.80
		定期性預金	253,175	59.30	240,802	55.77
		うち固定金利定期預金	244,287	57.21	232,826	53.92
		うち変動金利定期預金	8	0.00	8	0.00
		その他	690	0.16	731	0.17
	計	426,801	99.96	427,682	99.05	
	譲渡性預金	—	—	4,000	0.93	
	合計	426,801	99.96	431,682	99.98	
国際業務部門	預金	流動性預金	—	—	—	—
		うち有利息預金	—	—	—	—
		定期性預金	—	—	—	—
		その他	165	0.04	107	0.02
		計	165	0.04	107	0.02
		譲渡性預金	—	—	—	—
	合計	165	0.04	107	0.02	
	総合計	426,966	100.00	431,790	100.00	

#### 2. 平均残高

(単位：百万円・%)

		2017年度		2018年度		
			構成比		構成比	
国内業務部門	預金	流動性預金	165,796	38.82	179,376	41.74
		うち有利息預金	139,273	32.61	152,345	35.44
		定期性預金	259,706	60.81	248,865	57.91
		うち固定金利定期預金	251,327	58.84	237,358	55.22
		うち変動金利定期預金	8	0.00	8	0.00
		その他	1,280	0.30	1,264	0.29
	計	426,782	99.93	429,506	99.94	
	譲渡性預金	—	—	131	0.03	
	合計	426,782	99.93	429,637	99.97	
国際業務部門	預金	流動性預金	—	—	—	—
		うち有利息預金	—	—	—	—
		定期性預金	—	—	—	—
		その他	297	0.07	133	0.03
		計	297	0.07	133	0.03
		譲渡性預金	—	—	—	—
	合計	297	0.07	133	0.03	
	総合計	427,080	100.00	429,770	100.00	

(注) 1. 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金  
 2. 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金  
 固定金利定期預金：預入時に満期日までの利率が確定する定期預金  
 変動金利定期預金：預入期間中の市場金利の変化に応じて金利が変動する定期預金  
 3. 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

## 定期預金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2017年度	2018年度
定期預金	3ヵ月未満	72,008	38,995
	3ヵ月以上6ヵ月未満	57,722	61,029
	6ヵ月以上1年未満	72,863	95,122
	1年以上2年未満	17,491	17,410
	2年以上3年未満	15,019	15,803
	3年以上	8,093	3,057
	計	243,199	231,418
うち固定金利定期預金	3ヵ月未満	72,002	38,993
	3ヵ月以上6ヵ月未満	57,719	61,029
	6ヵ月以上1年未満	72,862	95,122
	1年以上2年未満	17,491	17,409
	2年以上3年未満	15,017	15,796
	3年以上	8,093	3,057
	計	243,187	231,409
うち変動金利定期預金	3ヵ月未満	6	1
	3ヵ月以上6ヵ月未満	3	—
	6ヵ月以上1年未満	0	—
	1年以上2年未満	—	1
	2年以上3年未満	1	6
	3年以上	0	—
	計	12	9

(注) 上記の預金残高には、積立定期預金を含んでおりません。

## 1店舗・従業員1人当たりの預金

(単位：百万円)

		2017年度	2018年度
1店舗当たり預金	国内店	11,235	11,071
	海外店	—	—
	合計	11,235	11,071
従業員1人当たり預金	国内店	878	948
	海外店	—	—
	合計	878	948

(注) 預金額には譲渡性預金を含んでおります。

## 預金者別預金残高

(単位：百万円・%)

	2017年度		2018年度	
	金額	構成比	金額	構成比
個人	342,875	80.30	338,389	79.10
一般法人	80,384	18.83	84,650	19.79
その他	3,706	0.87	4,750	1.11
合計	426,966	100.00	427,790	100.00

## 貸出金業務

### 貸出金科目別残高

(単位：百万円)

		2017年度		2018年度	
		期末残高	平均残高	期末残高	平均残高
国内業務部門	手形貸付	18,081	17,728	16,541	16,844
	証書貸付	259,960	258,797	262,858	261,527
	当座貸越	24,118	24,386	23,498	23,879
	割引手形	5,214	4,965	4,474	4,438
	計	307,375	305,877	307,373	306,689
国際業務部門	手形貸付	—	—	—	—
	証書貸付	—	—	—	—
	当座貸越	—	—	—	—
	割引手形	—	—	—	—
	計	—	—	—	—
	合計	307,375	305,877	307,373	306,689

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式により算出しております。

### 貸出金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		2017年度	2018年度
貸出金	1年以下	38,818	44,314
	1年超3年以下	27,239	29,054
	3年超5年以下	31,863	29,498
	5年超7年以下	25,080	22,452
	7年超	160,254	171,711
	期間の定めのないもの	24,118	10,342
	計	307,375	307,373
うち変動金利	1年以下	—	—
	1年超3年以下	8,683	8,328
	3年超5年以下	12,553	11,227
	5年超7年以下	8,776	6,473
	7年超	29,805	30,402
	期間の定めのないもの	1,128	1,798
	計	—	—
うち固定金利	1年以下	—	—
	1年超3年以下	18,555	20,726
	3年超5年以下	19,310	18,270
	5年超7年以下	16,303	15,979
	7年超	130,448	141,308
	期間の定めのないもの	22,990	8,544
	計	—	—

(注) 残存期間1年以下の貸出金については、変動金利、固定金利の区別をしておりません。

### 1店舗・従業員1人当たりの貸出金

(単位：百万円)

		2017年度	2018年度
1店舗当たり貸出金	国内店	8,088	7,881
	海外店	—	—
	合計	8,088	7,881
従業員1人当たり貸出金	国内店	619	675
	海外店	—	—
	合計	619	675

### 預貸率

(単位：%)

		2017年度	2018年度
期末預貸率	国内業務部門	71.05	70.93
	国際業務部門	—	—
	計	71.08	70.25
期中平均預貸率	国内業務部門	70.52	70.47
	国際業務部門	—	—
	計	70.57	70.43

(注) 預金には譲渡性預金を含んでおります。

### 貸出金残高・支払承諾見返額の担保別内訳

(単位：百万円)

	2017年度		2018年度	
	貸出金残高	支払承諾見返額	貸出金残高	支払承諾見返額
有価証券	52	—	—	—
債権	1,439	166	1,548	6
商品	—	—	—	—
不動産	19,171	167	93,807	6
その他	—	—	—	—
	計	20,664	95,355	12
保証	106,990	17	57,670	42
信用	179,720	83	154,347	179
	合計	307,375	434	307,373
うち劣後特約貸出金	(—)	—	(—)	—

### 中小企業等に対する貸出金

(単位：件・百万円・%)

		2017年度		2018年度	
		貸出先件数	貸出金残高	貸出先件数	貸出金残高
総貸出金	(A)	20,426	307,375	20,194	307,373
中小企業等貸出金	(B)	20,355	248,104	20,124	248,806
	(B) / (A)	99.65	80.71	99.65	80.94

(注) 中小企業等とは、資本金3億円（ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円）以下の会社または常用する従業員が300人（ただし、卸売業、物品賃貸業等は100人、小売業、飲食業は50人）以下の企業等であります。

# 単体情報

## 業種別貸出状況

(単位: 百万円・%)

業種別	2017年度		2018年度	
	金額	構成比	金額	構成比
国内業務部門				
製造業	25,965	8.45	27,584	8.97
農業・林業	460	0.15	562	0.18
漁業	64	0.02	63	0.02
鉱業・採石業・砂利採取業	98	0.03	257	0.08
建設業	19,301	6.28	19,976	6.50
電気・ガス・熱供給・水道業	2,125	0.69	2,167	0.71
情報通信業	930	0.30	1,223	0.40
運輸業・郵便業	5,071	1.65	4,992	1.62
卸売業・小売業	32,516	10.58	30,855	10.04
金融業・保険業	11,995	3.90	9,271	3.02
不動産業・物品賃貸業	50,287	16.36	52,736	17.16
各種サービス業	27,213	8.86	28,028	9.12
地方公共団体	40,688	13.24	40,787	13.27
その他	90,654	29.49	88,861	28.91
計	307,375	100.00	307,373	100.00
国際業務部門				
政府等	—	—	—	—
金融機関	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
計	—	—	—	—
合計	307,375	100.00	307,373	100.00

(注) 「国内業務部門」とは、当行の円建取引、「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。

## 消費者ローン残高

(単位: 百万円)

	2017年度	2018年度
住宅ローン残高	77,780	76,071
その他ローン残高	11,279	11,396
合計	89,060	87,468

## 貸出金償却額

(単位: 百万円)

	2017年度	2018年度
貸出金償却額	5	5

## 用途別の貸出金残高

(単位: 百万円・%)

	2017年度		2018年度	
	金額	構成比	金額	構成比
設備資金	153,018	49.78	155,480	50.58
運転資金	154,357	50.22	151,893	49.42
合計	307,375	100.00	307,373	100.00

## 貸倒引当金内訳

(単位: 百万円)

区分	2017年度		2018年度			摘要
	期末残高	当期増加額	当期減少額		期末残高	
			目的使用	その他※		
貸倒引当金						
一般貸倒引当金	646	336	—	646	336	※洗替による取崩額
個別貸倒引当金	2,460	2,162	—	2,460	2,162	※洗替による取崩額
うち非居住者向け債権分	—	—	—	—	—	

## 特定海外債権残高

該当ありません。

## リスク管理債権の状況

(単位: 百万円)

	2017年度		2018年度	
	単体	連結	単体	連結
リスク管理債権合計 (A)	12,835	12,994	12,007	12,143
破綻先債権	97	122	80	108
延滞債権	10,266	10,399	9,270	9,378
3ヵ月以上延滞債権	—	—	—	—
貸出条件緩和債権	2,472	2,472	2,656	2,656
貸出金残高 (末残) (B)	307,375	307,644	307,373	307,605
貸出金残高比合計 (A) ÷ (B)	4.17%	4.22%	3.90%	3.94%

(注) ①破綻先債権……会社更生法・民事再生法による更生・再生手続開始の申立て、破産の申立てまたは整理開始・特別清算開始の申立てなどの事由が生じている貸出金  
 ②延滞債権……元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により、元本または利息の取立または弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金 (①および債務者の経営再建または支援を図ることを目的として利息の支払を猶予している貸出金を除く)  
 ③3ヵ月以上延滞債権……元本または利息の支払が約定支払日の翌日から3ヵ月以上遅延している貸出金 (①②を除く)  
 ④貸出条件緩和債権……債務者の経営再建または支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金 (①～③を除く)

## 国際業務・内国為替業務・証券業務・その他

### 外国為替取扱高

(単位: 百万米ドル)

	2017年度		2018年度	
	金額	口数	金額	口数
仕向為替				
売渡為替	13	—	8	—
買入為替	0	—	0	—
被仕向為替				
支払為替	14	—	6	—
取立為替	0	—	0	—
合計	28	—	14	—

### 内国為替取扱高

(単位: 千口・百万円)

	2017年度		2018年度	
	口数	金額	口数	金額
送金為替				
各地へ向けた分	807	480,844	790	483,326
各地より受けた分	1,130	492,834	1,108	511,798
代金取立				
各地へ向けた分	24	37,371	20	45,883
各地より受けた分	20	28,620	17	41,173

### 有価証券の残存期間別残高

(単位: 百万円)

	2017年度						2018年度										
	国債	地方債	短期社債	社債	株式	その他の証券	国債	地方債	短期社債	社債	株式	その他の証券					
													うち外国債券	うち外国株式	うち外国債券	うち外国株式	
1年以下	—	—	—	2,320	—	5,213	—	—	—	2,005	—	—	4,322	—	1,276	1,276	—
1年超3年以下	4,893	—	—	8,726	—	5,706	4,443	—	8,010	—	—	8,496	—	8,968	3,183	—	—
3年超5年以下	6,115	—	—	3,867	—	11,818	3,963	—	612	—	—	2,325	—	14,328	3,295	—	—
5年超7年以下	206	—	—	2,205	—	1,143	—	—	—	—	—	712	—	4,012	—	—	—
7年超10年以下	2,006	798	—	2,503	—	9,740	101	—	2,002	1,214	—	4,743	—	6,244	101	—	—
10年超	10,020	—	—	1,597	—	2,683	2,108	—	1,182	—	—	1,610	—	1,302	1,302	—	—
期間の定めのないもの	—	—	—	102	2,555	17,827	350	—	—	—	—	103	2,881	14,138	361	—	—
合計	23,241	798	—	21,323	2,555	54,132	16,181	—	13,813	1,214	—	22,313	2,881	50,270	9,521	—	—

### 有価証券の種類別残高

(単位: 百万円・%)

		2017年度				2018年度			
		期末残高		平均残高		期末残高		平均残高	
		金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比
国内業務部門	国債	23,241	22.77	39,581	33.71	13,813	15.26	18,385	17.34
	地方債	798	0.78	693	0.59	1,214	1.35	1,094	1.03
	短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
	社債	21,323	20.90	18,201	15.50	22,313	24.66	24,112	22.74
	株式	2,555	2.50	1,877	1.60	2,881	3.18	2,034	1.92
その他の証券	37,950	37.19	39,660	33.77	40,748	45.03	43,903	41.40	
計	85,870	84.14	100,014	85.17	80,971	89.48	89,530	84.43	
国際業務部門	国債	—	—	—	—	—	—	—	—
	地方債	—	—	—	—	—	—	—	—
	短期社債	—	—	—	—	—	—	—	—
	社債	—	—	—	—	—	—	—	—
	株式	—	—	—	—	—	—	—	—
その他の証券	16,181	15.86	17,420	14.83	9,521	10.52	16,512	15.57	
うち外国債券	16,181	15.86	17,420	14.83	9,521	10.52	16,512	15.57	
計	16,181	15.86	17,420	14.83	9,521	10.52	16,512	15.57	
合計	102,051	100.00	117,435	100.00	90,493	100.00	106,043	100.00	

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式により算出しております。

### 公共債ディーリング実績 (商品有価証券平均残高)

(単位: 百万円)

	2017年度	2018年度
商品国債	0	0
商品地方債	—	—
商品政府保証債	—	—
合計	0	0

## 預証率

(単位：%)

		2017年度	2018年度
期末預証率	国内業務部門	20.11	18.75
	国際業務部門	9,764.40	8,837.88
	計	23.90	20.95
期中平均預証率	国内業務部門	23.43	20.83
	国際業務部門	5,855.59	12,397.28
	計	27.49	24.67

## 有価証券関係

### 1. 売買目的有価証券

該当ありません。

### 2. 満期保有目的の債券

該当ありません。

### 3. その他有価証券

(単位：百万円)

種類	期別	2017年度 (2018年3月31日)			2018年度 (2019年3月31日)		
		貸借対照表計上額	取得原価	差 額	貸借対照表計上額	取得原価	差 額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	1,531	825	706	1,741	1,121	620
	債券	28,631	27,846	785	32,925	32,161	764
	国債	16,229	15,522	707	13,813	13,202	611
	地方債	401	400	1	1,214	1,200	14
	社債	12,001	11,924	77	17,897	17,758	138
	その他	25,019	23,783	1,235	31,514	30,473	1,040
	外国証券	3,695	3,638	56	4,788	4,755	33
	小計	55,182	52,455	2,727	66,182	63,756	2,425
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	248	264	△15	428	485	△56
	債券	16,731	16,849	△118	4,416	4,418	△2
	国債	7,011	7,107	△95	—	—	—
	地方債	397	400	△2	—	—	—
	社債	9,322	9,342	△20	4,416	4,418	△2
	その他	29,113	29,869	△755	18,637	19,122	△484
	外国証券	12,486	12,670	△184	4,733	4,815	△82
	小計	46,093	46,983	△889	23,482	24,026	△543
	合計	101,276	99,438	1,837	89,664	87,782	1,881

### 4. 2017年度・2018年度中に売却した満期保有目的の債券

該当ありません。

## 5. 2017年度・2018年度中に売却したその他有価証券

(単位：百万円)

種類	期別	2017年度 (2017年4月1日から2018年3月31日まで)			2018年度 (2018年4月1日から2019年3月31日まで)		
		売却額	売却益の合計額	売却損の合計額	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式		674	87	△0	198	25	△10
債券		40,267	1,343	△432	18,829	57	△39
国債		40,267	1,343	△432	16,912	48	△38
地方債		—	—	—	—	—	—
社債		—	—	—	1,917	9	△1
その他		21,356	171	△943	79,231	1,509	△752
	合計	62,299	1,602	△1,376	98,260	1,593	△802

### 6. 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

### 7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券（時価を把握することが極めて困難なものを除く）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該事業年度の損失として処理（以下「減損処理」という。）しております。

2017年度における減損処理額は、株式55百万円であります。

2018年度における減損処理額は、株式21百万円であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、時価が取得原価又は償却原価に比べて50%以上下落した場合、又は30%以上50%未満下落した場合において過去の一定期間における時価の推移ならびに当該発行会社の業績等を勘案した基準により行っております。

(追加情報)

従来、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、「時価が取得原価又は償却原価に比べて30%以上下落した場合」としておりましたが、金融環境の変化や運用有価証券の価格変動率等を踏まえ、より合理的な判断に基づいて減損処理を行うため、当事業年度から上記基準に変更しております。

なお、この変更により、その他経常費用は36百万円減少し、税引前当期純利益は36百万円増加しております。

## 金銭の信託関係

### 1. 運用目的の金銭の信託

該当ありません。

### 2. 満期保有目的の金銭の信託

該当ありません。

### 3. その他の金銭の信託（運用目的及び満期保有目的以外）

該当ありません。

## その他有価証券評価差額金

貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	2017年度 (2018年3月31日)	2018年度 (2019年3月31日)
評価差額	1,837	1,881
その他有価証券	1,837	1,881
その他の金銭の信託	—	—
(△) 繰延税金負債	526	554
その他有価証券評価差額金	1,310	1,327

# 単体情報

## ■ デリバティブ取引

### 1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

#### (1) 金利関連取引

該当ありません。

#### (2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2017年度 (2018年3月31日)				2018年度 (2019年3月31日)			
		契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	評価損益	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	評価損益
金融商品取引所	通貨先物	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
	通貨オプション	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
店頭	通貨スワップ	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
	為替予約	売建	10,869	—	△12	△12	4,385	—	6
		買建	19	—	0	0	—	—	—
	通貨オプション	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
その他	売建	—	—	—	—	—	—	—	
	買建	—	—	—	—	—	—	—	
合計		—	—	△12	△12	—	—	6	6

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。  
2. 時価の算定  
割引現在価値等により算定しております。

#### (3) 株式関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	2017年度 (2018年3月31日)				2018年度 (2019年3月31日)			
		契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	評価損益	契約額等	契約額等のうち1年超のもの	時価	評価損益
金融商品取引所	株式指数先物	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
	株式指数オプション	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
店頭	有価証券店頭オプション	売建	—	—	—	1,955	—	3	△6
		買建	—	—	—	—	—	—	—
	有価証券店頭指値等スワップ	株価指数変化率受取・短期変動金利支払	—	—	—	—	—	—	—
		短期変動金利受取・株価指数変化率支払	—	—	—	—	—	—	—
	その他	売建	—	—	—	—	—	—	—
		買建	—	—	—	—	—	—	—
合計		—	—	—	—	—	3	△6	

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。  
2. 時価の算定  
店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算出しております。

#### (4) 債券関連取引

該当ありません。

#### (5) 商品関連取引

該当ありません。

#### (6) クレジットデリバティブ取引

該当ありません。

### 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引はありません。

# 株式情報

## ■ 株式の状況

### 所有者別状況

#### ①普通株式

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況 (1単元の株式数1,000株)								
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	単元未満株式の状況 (株)
株主数 (人)	—	19	6	304	—	—	840	1,169	—
所有株式数 (単元)	—	6,637	1,251	11,910	—	—	11,772	31,570	230,000
所有株式数の割合 (%)	—	21.02	3.96	37.73	—	—	37.29	100.00	—

(注) 自己株式は「個人その他」に610単元、「単元未満株式の状況」に195株含まれております。

#### ②A種優先株式

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況 (1単元の株式数1,000株)								
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	単元未満株式の状況 (株)
株主数 (人)	—	—	—	1	—	—	—	1	—
所有株式数 (単元)	—	—	—	6,000	—	—	—	6,000	—
所有株式数の割合 (%)	—	—	—	100.00	—	—	—	100.00	—

### 大株主の状況

#### ①普通株式

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合 (%)
株式会社みずほ銀行	1,450	4.64
株式会社クオードコーポレーション	1,400	4.48
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口4)	1,399	4.48
三田興産株式会社	1,327	4.25
三田村 俊文	1,296	4.15
日本土地建物株式会社	850	2.72
みずほ証券株式会社	704	2.25
明治安田生命保険相互会社	650	2.08
株式会社ホクコン	615	1.97
福邦行員持株会	607	1.94
計	10,300	33.02

(注) 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口4) 所有株式は、預金保険機構が当該信託銀行に信託しているものであります。

#### ②A種優先株式

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合 (%)
株式会社整理回収機構	6,000	100.00
計	6,000	100.00

# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

「銀行法施行規則（1982年大蔵省令第10号）第19条の2第1項第5号二等に規定する自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項」（2014年2月18日 金融庁告示第7号、いわゆるバーゼルⅢ第3の柱（市場規律））として、事業年度に係る説明書類に記載すべき事項を当該告示に則り、本章で開示しております。  
 なお本章中における「自己資本比率告示」及び「金融庁告示」は、2006年3月27日 金融庁告示第19号、いわゆるバーゼルⅢ第1の柱（最低所要自己資本比率）を指しております。

## ■ 自己資本の構成に関する開示事項

### 単体

項目	2018年度末		2017年度末	
		経過措置による 不算入額		経過措置による 不算入額
<b>コア資本に係る基礎項目 (1)</b>				
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	19,552		19,469	
うち、資本金及び資本剰余金の額	13,556		13,556	
うち、利益剰余金の額	6,400		6,378	
うち、自己株式の額 (△)	237		236	
うち、社外流出予定額 (△)	167		229	
うち、上記以外に該当するものの額	—		—	
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	—		—	
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	220		525	
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	220		525	
うち、適格引当金コア資本算入額	—		—	
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	275		331	
コア資本に係る基礎項目の額 (イ)	20,047		20,326	
<b>コア資本に係る調整項目 (2)</b>				
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	829		214	53
うち、のれんに係るものの額	—		—	—
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	829		214	53
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	287		301	75
適格引当金不足額	—		—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	—		—	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—		—	—
前払年金費用の額	—		—	—
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	—		—	—
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—		—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—		39	9
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—		—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—		—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—		—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—		—	—
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—		—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—		—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—		—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—		—	—
コア資本に係る調整項目の額 (ロ)	1,117		555	
<b>自己資本</b>				
自己資本の額 ((イ) - (ロ)) (ハ)	18,930		19,770	
<b>リスク・アセット等 (3)</b>				
信用リスク・アセットの額の合計額	233,033		229,481	
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	2,269		1,556	
うち、無形固定資産（のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）	—		385	
うち、繰延税金資産	—		377	
うち、前払年金費用	—		—	
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	—		—	
うち、上記以外に該当するものの額	2,269		792	
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—		—	
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	12,783		13,338	
信用リスク・アセット調整額	—		—	
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—		—	
リスク・アセット等の額の合計額 (ニ)	245,817		242,820	
<b>自己資本比率</b>				
自己資本比率 ((ハ) / (ニ))	7.70%		8.14%	

## 連結

項目	2018年度末		2017年度末	
		経過措置による 不算入額		経過措置による 不算入額
<b>コア資本に係る基礎項目 (1)</b>				
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	19,743		19,648	
うち、資本金及び資本剰余金の額	13,556		13,556	
うち、利益剰余金の額	6,592		6,558	
うち、自己株式の額 (△)	237		236	
うち、社外流出予定額 (△)	167		229	
うち、上記以外に該当するものの額	—		—	
コア資本に算入されるその他の包括利益累計額	△139		△129	
うち、為替換算調整勘定	—		—	
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	—		—	
コア資本に係る調整後非支配株主持分の額	—		—	
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	223		527	
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	223		527	
うち、適格引当金コア資本算入額	—		—	
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	275		331	
非支配株主持分のうち、経過措置によりコア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—		—	
コア資本に係る基礎項目の額 (イ)	20,103		20,379	
<b>コア資本に係る調整項目 (2)</b>				
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	830		214	53
うち、のれんに係るものの額	—		—	—
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	830		214	53
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	287		301	75
適格引当金不足額	—		—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	—		—	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—		—	—
退職給付に係る資産の額	—		—	—
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	—		—	—
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—		—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—		25	6
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—		—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—		—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—		—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—		—	—
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—		—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—		—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—		—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—		—	—
コア資本に係る調整項目の額 (ロ)	1,117		541	
<b>自己資本</b>				
自己資本の額 ((イ) - (ロ)) (ハ)	18,985		19,838	
<b>リスク・アセット等 (3)</b>				
信用リスク・アセットの額の合計額	233,481		229,917	
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	2,269		1,556	
うち、無形固定資産（のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）	—		385	
うち、繰延税金資産	—		377	
うち、退職給付に係る資産	—		—	
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	—		—	
うち、上記以外に該当するものの額	2,269		792	
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—		—	
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	12,959		13,518	
信用リスク・アセット調整額	—		—	
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—		—	
リスク・アセット等の額の合計額 (ニ)	246,440		243,436	
<b>自己資本比率</b>				
自己資本比率 ((ハ) / (ニ))	7.70%		8.14%	



# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

## ■ 定性的な開示事項

### 1. 連結の範囲に関する事項

連結自己資本比率の算出対象会社（連結グループ）と連結財務諸表規則第5条に基づき連結との範囲（会計連結範囲）に含まれる会社との相違点および当該相違点の生じた原因はございません。

- 連結子会社の数 1社  
・福邦カード(株) : クレジットカード業

なお、比例連結法を適用している金融業務を営む関連法人等、連結グループに属する会社であって会計連結範囲に含まれないものおよび連結グループに属しない会社であって会計連結範囲に含まれないものはございません。

また、連結グループ内の資金および自己資本の移動に係る制限等はございません。

### 2. 自己資本調達手段の概要

2019年3月末における自己資本調達手段の概要は、以下のとおりです。

発行主体	資本調達手段の種類	コア資本に係る基礎項目の額に算入された額
当行	普通株式	7,556百万円
当行	A種優先株式	6,000百万円

連結グループの資本調達手段は普通株式の発行によるものです。

定性的な開示事項における以下の項目につきましては、主に当行単体について記載しておりますが、連結グループにおける内容もほぼ同等で内容が重複いたしますので、連結に関する記載は省略いたしております。

### 3. 自己資本の充実度に関する評価方法の概要

当行では、十分な自己資本を維持しつつ収益性の改善と向上へ向けた取り組みを実施することを方針とし、経営体力に見合ったリスクコントロールによる健全性を確保することとしております。自己資本の充実度に関しては、当行が自ら晒されているリスクを統合的に把握し、保有するリスクと自己資本を比較し、そのリスクに照らして自己資本の十分性を評価しております。

具体的には、自己資本(コア自己資本)の範囲内で、各リスクカテゴリーに対して業務計画に基づいたリスク資本を配賦し、信用リスク、市場リスク、オペレーショナルリスク等の各リスク量がその範囲内に収まるようにコントロールしております。

### 4. 信用リスクに関する事項

#### (1) リスク管理の方針および手続の概要

信用リスクとは、与信先の財務状況の悪化等の信用事由に起因して、資産の価値が減少ないし消滅し、損失を被るリスクをいいます。

当行では、「信用リスク管理規程」を制定し、信用リスクの顕在化により発生する損失を抑制するために与信先の信用状態と与信実行から回収までの過程を個別案件ごとに管理するとともに、信用リスクを適正に把握し、適切な与信ポートフォリオ管理により資産の健全性並びに収益性の維持向上を目指しております。

個別債務者の信用リスク管理については、格付・自己査定制度に基づき格付および債務者区分による評価を行っております。評価は、新規与信実行時および、実行後の格付・自己査定において随時行い、常に個別債務者の信用状況を把握するよう努めております。自己査定とは、債務者区分および担保・保証等の状況をもとに、債権の回収の危険性の度合いに応じて資産の分類を行うものです。資産査定部門は、自己査定の集計結果等を経営に報告しております。

銀行全体の与信ポートフォリオ管理については、与信の集中リスクを回避するための自主限度額を設けるとともに、信用供与に係るリスクを客観的かつ定量的に把握するため、信用リスク量の定量化に取り組んでおります。なお、リスク管理部門は、モニタリング結果を定期的に経営に報告しております。

#### (2) 自己査定と償却・引当

当行では、金融検査マニュアル等に則した「自己査定基準」および「償却・引当基準」を定めるとともに、自己査定および償却・引当を適切に行っております。

貸倒引当金は、「償却・引当基準」に基づいて計上しており、債務者区分が「正常先」「要注意先」に該当する債権については、一定の種類毎に分類し、過去の貸倒実績から計算した将来の予想損失額を一般貸倒引当金に計上しております。「破綻懸念先」「実質破綻先」「破綻先」に該当する債権については、担保・保証等により回収が見込まれる部分以外の額について、直接償却または個別貸倒引当金の計上を行っております。

#### (3) 標準的手法が適用されるポートフォリオに関する事項

当行では、自己資本比率算出上の信用リスク相当額の算出にあたっては、「標準的手法」を採用しており、保有資産のリスク・ウェイトを判定する上で、以下の適格格付機関による外部格付を使用しております。

外部格付の使用において、当行が選択しております適格格付機関は以下のとおりです。

- ・(株)格付投資情報センター (R&I)
  - ・(株)日本格付研究所 (JCR)
  - ・ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク (Moody's)
  - ・S&P グローバル・レーティング (S&P)
- なお、エクスポージャーごとの適格格付機関の使い分けは行っておりません。

### 5. 信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針及び手続の概要

信用リスク削減手法とは、担保、保証、貸出金と預金の相殺等により、保有債権のリスクを削減する手法をいいます。

当行では、貸出等の与信行為を行うにあたり、返済可能性について十分な検証を行っておりますが、そのうえで、信用リスク軽減のために、担保や保証等をいただくことがございます。担保や保証の種類として、担保では預金、有価証券、不動産等があり、このうち不動産担保が大半を占めております。保証では、信用保証協会、政府関係機関および保証会社による保証が主となっております。担保・保証の評価や管理等の手続については、当行が定める「担保評価基準及び要領」「融資事務規程」等の行内規程に基づいて、適切な取扱いを行っております。

また、貸出金と預金の相殺を行う取引としては、手形貸付、割引手形、証書貸付、当座貸越、債務保証、外国為替等を対象としており、「融資事務規程」等の行内規定に基づいて、手続を行います。

なお、自己資本比率算出にあたっては、金融庁告示の要件を満たす適格担保および適格保証、および貸出金と自行預金の相殺を、信用リスク削減手法として適用し、リスク・アセットを削減しております。適格担保の内容としては自行預金、国債、上場株式等、適格保証の内容としては住宅金融支援機構（前住宅金融公庫）や政府関係機関、地方公共団体の保証などが主なものです。

### 6. 派生商品取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針及び手続の概要

当行における派生商品取引としては、外国為替先物予約取引、債券先物取引、株価指数先物取引等があります。

派生商品取引における取引相手の信用リスクについては、カレント・エクスポージャー方式（注）により算出した信用リスク量が、取引相手毎の信用状況に対し過大なものにならないように管理しております。

（注）カレント・エクスポージャー方式とは、デリバティブ取引の信用リスク計測手段の1つで、取引を時価評価することによって再構築コストを算出し、これに契約期間中に生じるであろう同コストの増加見込み額（ポテンシャル・エクスポージャー）を付加して算出する方法です。

### 7. 証券化エクスポージャーに関する事項

#### (1) リスク管理の方針及びリスク特性の概要

当行における証券化取引については、オリジネーターである案件はなく、投資家として取り組んでおります。証券化エクスポージャーについては、住宅金融支援機構が発行する貸付債権担保住宅金融公庫債券のみで、住宅金融支援機構向けエクスポージャーとして管理しております。なお、再証券化エクスポージャーについては該当がございません。

### 8. オペレーショナル・リスクに関する事項

#### (1) オペレーショナル・リスクのリスク管理の方針及び手続の概要

オペレーショナル・リスクとは、内部プロセス・人・システムが不適切であること、もしくは機能しないこと、または外部要因によって生じる損失にかかるリスクをいいます。

当行では、「オペレーショナル・リスク管理方針」に基づき、事務リスク、システムリスクおよびその他オペレーショナル・リスクをオペレーショナル・リスクとして位置付け、それぞれ管理体制を定め、業務の健全性および適切性の確保を図っております。

また、事務リスクの軽減と事故・不正等の未然防止に資することを目的とした「事務リスク管理規程」およびシステムの安全性、信頼性を維持するとともに、情報資産の保護を図ることを目的とした「システムリスク管理規程」をそれぞれ定め、リスクの把握、管理を実施し、リスクの軽減等に努めております。

オペレーショナル・リスクの管理は企画部を所管とし、関係部署との連携を図りながら適切な管理を行っております。所管部は定期的にリスクの状況に関して経営会議等へ報告しております。

#### (2) オペレーショナル・リスク相当額算出に使用する手法

当行では、自己資本比率算出上のオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたっては、「基礎的手法」（注）を採用しております。

（注）「基礎的手法」とは、自己資本比率算出において、オペレーショナル・リスク相当額を算出するための一手法であり、1年間の粗利益の15%の直近3年間の平均値をオペレーショナル・リスク相当額とするものです。

### 9. 出資等に関するリスク管理の方針及び手続の概要

出資等のリスク管理につきましては、定期的にリスクを評価し、その状況について、ALM委員会および経営会議へ報告を行っております。

リスク評価の方法として、上場株式等につきましては、時価評価およびバリュエーション・アット・リスク (VaR) によりリスク量を計測し、予め定めた損失限度枠の遵守状況をモニタリングしております。

### 10. 金利リスクに関する事項

#### (1) リスク管理の方針及び手続の概要

当行は、金利リスクを含めた市場リスクを適切に管理するために「市場リスク管理方針」、および「市場リスク管理規程」を制定し、当行の業務の規模、特性およびリスクプロファイルに応じた市場リスクの管理に努めております。

# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

銀行全ての金利感応資産・負債を対象に、金利ショックに対する経済的価値の減少額（ΔEVE）について月次にてモニタリングを行うとともに、市場リスク管理の状況に関して、取締役会等が適切に評価、判断できる情報を報告し、金利リスクに対し組織的に対応できる態勢を整備しております。なお、連結子会社の金利リスクは軽微と判断し、計測対象外としております。

市場リスク管理の具体的な手法としては、自己資本、収益力、リスク管理能力等を勘案した市場リスク量に対する各限度枠（リスク限度枠、損失限度額等）、ならびにこれらに対するアラームポイントを設定し、経営体力から見て過大な市場リスクテイクとならないよう適切な管理をしております。限度枠を超過した場合は、当該リスクに関する業務の縮小・撤退及びポジション、リスク等の削減等の是非についての情報をもとに取締役会等において、意思決定を行います。

## （2）金利リスクの算定方法の概要

流動性預金については、コア預金モデルを使用し、モデルでの計測結果に基づき満期を割り当てております。コア預金モデルは、流動性預金残高の実績値および市場金利等の推移をもとに統計的手法により将来の残高推移の推計を行っております。流動性預金に割り当てられた最長の金利改定満期は10年とし、報告基準日の金利改定の平均満期は4.04年となっております。なお、固定金利貸出の期限前償還や定期預金の早期解約については、金融庁が定める保守的な前提を使用しております。

複数通貨の集計方法については、通貨別に算出した金利リスクを保守的な方法により単純合算しております。なお、通貨間の相関は考慮しておりません。

割引金利にはスプレッドを含めず、リスクフリーレートを使用し計測しております。

当行では、VaR（バリュー・アット・リスク）、BPV（ベシス・ポイント・バリュー）、ギャップ分析、シミュレーション等を用いたリスクの計測・分析等を行っております。併せてストレステストやバックテスト等の実施により計測および管理方法の妥当性・有効性を検証しております。

VaRの算出にあたっては、過去5年間の金利データから算出した最大損失額を金利ショックとして使用しております。VaRの前提条件は、金利変動が正規分布に従うと仮定する分散共分散法を採用し、信頼区間を99.0%、保有期間は預金・貸出金等は240日および有価証券は120日としています。

## ■ 定量的な開示事項

その他金融機関等（自己資本比率告示第29条第6項第1号に規定するその他金融機関等をいう。）であった銀行の子法人等であるもののうち、自己資本比率規制上の所要自己資本を下回った会社の名称と所要自己資本を下回った会社はございません。

### 1. 自己資本の充実度に関する事項

標準的手法が適用されるポートフォリオ及び標準的手法が複数のポートフォリオに適用される場合における適切なポートフォリオの区分ごとの内訳

#### ① 総所要自己資本額

（単位：百万円）

項目	単体所要自己資本額		連結所要自己資本額	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
信用リスク（標準的手法）	9,179	9,321	9,196	9,339
オペレーショナル・リスク（基礎的手法）	533	511	540	518
合計	9,712	9,832	9,737	9,857

#### ② 信用リスクのポートフォリオの区分ごとの内訳

（単位：百万円）

項目	単体				連結			
	2017年度末		2018年度末		2017年度末		2018年度末	
	リスク・アセット	所要自己資本額	リスク・アセット	所要自己資本額	リスク・アセット	所要自己資本額	リスク・アセット	所要自己資本額
信用リスク（標準的手法）	229,481	9,179	233,033	9,321	229,917	9,196	233,481	9,339
ソブリン向け	895	35	700	28	895	35	700	28
金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	8,474	338	6,596	263	8,474	338	6,596	263
法人等向け	64,650	2,586	62,738	2,509	64,650	2,586	62,738	2,509
中小企業等向け及び個人向け	71,603	2,864	75,328	3,013	72,010	2,880	75,749	3,029
抵当権付住宅ローン	16,860	674	15,695	627	16,860	674	15,695	627
不動産取得等事業向け	29,160	1,166	31,286	1,251	29,160	1,166	31,286	1,251
三月以上延滞等	780	31	2,397	95	807	32	2,422	96
信用保証協会等による保証付	916	36	938	37	916	36	938	37
出資等	19,700	788	9,751	390	19,701	788	9,751	390
上記以外の資産	13,952	558	4,970	198	13,954	558	4,972	198
経理情報によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	1,556	62	2,269	90	1,556	62	2,269	90
リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるものの額			19,311	772			19,311	772
ルック・スルー方式			19,311	772			19,311	772
マンドート方式			—	—			—	—
蓋然性方式（250%）			—	—			—	—
蓋然性方式（400%）			—	—			—	—
フォールバック方式			—	—			—	—
オフ・バランス取引等	835	33	1,027	41	835	33	1,027	41
CVAリスク相当額	88	3	20	0	88	3	20	0
中央清算機関関連	6	0	—	—	6	0	—	—
オペレーショナル・リスク（基礎的手法）	13,338	533	12,783	511	13,518	540	12,959	518
合計	242,820	9,712	245,817	9,832	243,436	9,737	246,440	9,857

（注）1. 所要自己資本額＝リスク・アセット×4%  
 2. ソブリンには、地方公共団体向け債権及び政府関係機関向け債権を含みます。  
 3. オペレーショナル・リスクについて、当行が採用しております基礎的手法の算式は次のとおりです。  

$$\frac{\text{粗利益（直近3年間のうち正の値であった合計額）} \times 15\%}{\text{直近3年間のうち粗利益が正の値であった年数}} \times 12.5$$

# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

## 2. 信用リスクに関する事項

(1) 信用リスクに関するエクスポージャーおよび三月以上延滞エクスポージャーの期末残高

### ① 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高

取引種類の名称	信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高			
	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	308,239	308,437	308,508	308,669
うち貸出金	307,375	307,373	307,644	307,605
債券	45,363	37,341	45,363	37,341
デリバティブ	8,205	13,107	8,205	13,107
その他	110,788	125,689	111,086	126,040
合計	472,596	484,575	473,163	485,158

### ② 有価証券のうち満期があるものの期末残高

(残存期間別)

項目	単体					単体				
	2017年度末					2018年度末				
	国債	地方債	社債	その他	合計	国債	地方債	社債	その他	合計
1年以下	—	—	2,320	5,213	7,533	2,005	—	4,322	1,276	7,604
1年超3年以下	4,893	—	8,726	5,706	19,326	8,010	—	8,496	8,968	25,475
3年超5年以下	6,115	—	3,867	11,818	21,801	612	—	2,325	14,328	17,265
5年超7年以下	206	—	2,205	1,143	3,555	—	—	712	4,012	4,725
7年超10年以下	2,006	798	2,503	9,740	15,048	2,002	1,214	4,743	6,244	14,204
10年超	10,020	—	1,597	2,683	14,300	1,182	—	1,610	1,302	4,095
期間の定めのないもの	—	—	102	17,538	17,640	—	—	103	13,841	13,945
合計	23,241	798	21,323	53,842	99,206	13,813	1,214	22,313	49,974	87,315

### ③ 貸出金の期末残高

(地域別・業種別・残存期間別)

地域別 業種別 残存期間別	項目	単体		単体	
		2017年度末		2018年度末	
		貸出金の 期末残高	三月以上延滞エクス ポージャーの期末残高	貸出金の 期末残高	三月以上延滞エクス ポージャーの期末残高
国内計		307,375	1,162	307,373	1,802
国外計		—	—	—	—
地域別合計		307,375	1,162	307,373	1,802
製造業		25,965	39	27,584	126
農業・林業		460	1	562	12
漁業		64	—	63	—
鉱業・採石業・砂利採取業		98	38	257	31
建設業		19,301	123	19,976	138
電気・ガス・熱供給・水道業		2,125	—	2,167	—
情報通信業		930	—	1,223	—
運輸業・郵便業		5,071	66	4,992	2
卸売業・小売業		32,516	148	30,855	86
金融業・保険業		11,995	—	9,271	—
不動産業・物品賃貸業		50,287	75	52,736	125
各種サービス業		27,213	218	28,028	199
地方公共団体		40,688	—	40,787	—
その他		90,654	449	88,861	1,079
業種別計		307,375	1,162	307,373	1,802
1年以下		88,984		82,716	
1年超3年以下		55,801		59,231	
3年超5年以下		37,900		40,055	
5年超7年以下		29,041		30,357	
7年超10年以下		27,263		28,998	
10年超		68,384		66,014	
残存期間別合計		307,375		307,373	

(注) ②、③について、連結の有価証券及び貸出金の期末残高の把握が困難であるため、記載しておりません。

(2) 一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金の期末残高及び期中増減額

### ① 一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金の期末残高及び期中増減額

	単体			
	2017年度末		2018年度末	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
一般貸倒引当金	646	△414	336	△310
個別貸倒引当金	2,460	△370	2,162	△298
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	3,107	△784	2,499	△608

	連結			
	2017年度末		2018年度末	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
一般貸倒引当金	649	△414	340	△309
個別貸倒引当金	2,597	△360	2,277	△320
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	3,246	△774	2,617	△629

### ② 業種別並びに地域別の個別貸倒引当金の額及び貸出金償却の額

地域別 業種別	項目	単体					
		2017年度末			2018年度末		
		個別貸倒引当金 期末残高	期中増減額	貸出金償却の額	個別貸倒引当金 期末残高	期中増減額	貸出金償却の額
国内計		2,460	△370	5	2,162	△298	5
国外計		—	—	—	—	—	—
地域別合計		2,460	△370	5	2,162	△298	5
製造業		80	△27	—	100	19	4
農業・林業		12	12	—	53	41	—
鉱業・採石業・砂利採取業		19	△22	—	20	0	—
建設業		142	△120	—	132	△10	0
情報通信業		4	△0	—	5	0	—
運輸業・郵便業		76	44	—	79	3	—
卸売業・小売業		1,077	14	2	802	△275	0
金融業・保険業		—	—	—	7	7	—
不動産業・物品賃貸業		709	△125	—	617	△92	—
各種サービス業		188	△76	2	206	17	—
その他		149	△67	1	137	△11	—
業種別計		2,460	△370	5	2,162	△298	5

(注) 連結の個別貸倒引当金の額、貸出金償却の額は、把握が困難であるため、記載しておりません。

# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

## (3) リスク・ウェイトの区分ごとの信用リスク削減手法の効果を勘案した後の残高 (単位：百万円)

	単体				連結			
	2017年度末		2018年度末		2017年度末		2018年度末	
	格付適用	格付不適用	格付適用	格付不適用	格付適用	格付不適用	格付適用	格付不適用
0%	524	120,285	—	127,551	524	127,334	—	127,551
10%	—	13,054	—	15,385	—	13,064	—	15,385
20%	27,316	16,561	23,511	12,712	27,316	20,618	23,511	12,712
35%	—	48,173	—	44,843	—	48,173	—	44,843
50%	11,199	131	9,634	99	11,199	367	9,634	102
75%	—	95,464	—	93,500	—	96,006	—	94,061
100%	3,362	94,296	4,126	100,829	3,362	113,885	4,126	100,838
150%	—	348	—	1,269	—	361	—	1,280
200%	—	1,851	—	—	—	1,851	—	—
250%	—	512	—	2,587	—	512	—	2,587
350%	—	—	—	—	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	42,403	390,679	37,272	398,779	42,403	422,176	37,272	399,362

(注) 1. 「格付適用」とは、リスク・ウェイト算定にあたり、格付を適用しているエクスポージャーであり、「格付不適用」とは、格付を適用していないエクスポージャーであります。なお、格付は適格格付機関が付与しているものに限ります。  
 2. 「格付適用」エクスポージャーには、原債務者の格付を適用しているエクスポージャーに加え、保証人の格付を適用しているエクスポージャーや、ソブリン格付に準拠したリスク・ウェイトを適用しているエクスポージャーが含まれます。  
 3. 2018年度末は、リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャーは含んでおりません。

## 3. 信用リスク削減手法に関する事項

信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャーの額

(単位：百万円)

エクスポージャー区分	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
適格金融資産担保が適用されたエクスポージャー	5,201	9,004	5,201	9,004
現金及び自行預金	5,201	9,004	5,201	9,004
金	—	—	—	—
適格債券	—	—	—	—
適格株式	—	—	—	—
適格投資信託	—	—	—	—
保証またはクレジット・デリバティブが適用されたエクスポージャー	71	—	71	—
適格保証	71	—	71	—
適格クレジットデリバティブ	—	—	—	—

(注) 当行は、適格金融資産担保について簡便手法を採用しています。

## 4. 派生商品取引の取引相手のリスクに関する事項

### (1) 派生商品取引の与信相当額算出に用いる方式

スワップその他の派生商品取引の与信相当額はカレント・エクスポージャー方式にて算出しております。

### (2) 派生商品取引のグロス再構築コストの額および与信相当額

(単位：百万円)

	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
グロス再構築コストの額	55	—	55	—
与信相当額	163	43	163	43
外国為替関連取引	163	43	163	43

## 5. 証券化エクスポージャーに関する事項

(1) 銀行がオリジネーターである場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

該当ありません。

(2) 銀行が投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

該当ありません。

## 6. 出資等又は株式等エクスポージャーに関する事項

### (1) 出資等（株式・出資金等）の（連結）貸借対照表計上額及び時価 (単位：百万円)

	単体		連結	
	貸借対照表計上額及び時価		連結貸借対照表計上額及び時価	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
上場している出資等	1,979	2,376	1,979	2,376
上場に該当しない出資等	865	801	496	432
合計	2,845	3,177	2,476	2,808

### (2) 出資等の売却及び償却に伴う損益の額 (単位：百万円)

	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
売却損益額	101	△25	101	△25
償却額	55	21	55	21

### (3) (連結) 貸借対照表で認識され、(連結) 損益計算書で認識されない評価損益の額 (単位：百万円)

	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
(連結) 貸借対照表で認識され、(連結) 損益計算書で認識されない評価損益の額	1,837	1,881	1,837	1,881

# バーゼルⅢ 第3の柱（市場規律）に基づく開示

## 7. リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャーの額

	単体		連結	
	2017年度末	2018年度末	2017年度末	2018年度末
リスク・スルー方式		31,375		31,375
マンドート方式		—		—
蓋然性方式 (250%)		—		—
蓋然性方式 (400%)		—		—
フォールバック方式		—		—

(注) 2018年度末より、改正後の告示に基づき、本開示事項を記載しております。なお、適用初年度であるため、2017年度末におけるエクスポージャーの該当はありません。

## 8. 金利リスクに関する事項

### (1) ΔEVE

#### ① 単体

IRRBB1：金利リスク									
項番		イ		ロ		ハ		ニ	
		ΔEVE		ΔNII		ΔEVE		ΔNII	
		当期末	前期末	当期末	前期末	当期末	前期末	当期末	前期末
1	上方パラレルシフト	1,019							
2	下方パラレルシフト	0							
3	スティープ化	735							
4	フラット化	—							
5	短期金利上昇	—							
6	短期金利低下	—							
7	最大値	1,019							
		ホ		ヘ					
8	自己資本の額	当期末		前期末					
		18,930							

#### ② 連結

IRRBB1：金利リスク									
項番		イ		ロ		ハ		ニ	
		ΔEVE		ΔNII		ΔEVE		ΔNII	
		当期末	前期末	当期末	前期末	当期末	前期末	当期末	前期末
1	上方パラレルシフト	1,019							
2	下方パラレルシフト	0							
3	スティープ化	735							
4	フラット化	—							
5	短期金利上昇	—							
6	短期金利低下	—							
7	最大値	1,019							
		ホ		ヘ					
8	自己資本の額	当期末		前期末					
		18,985							

### (2) VaR

単体	
2017年度末	2018年度末
△76	846

# 報酬等に関する開示事項

## ■ 報酬等に関する開示事項

以下の項目につきましては、主として連結グループについて記載しておりますが、単体における内容もほぼ同等であり、内容が重複するため記載を省略しております。

### 1. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

#### (1) 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」および「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

#### ①「対象役員」の範囲

対象役員は、当行の取締役および監査役であります。なお、社外取締役および社外監査役を除いております。

#### ②「対象従業員等」の範囲

当行では、対象役員以外の当行の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員のうち、「高額の報酬等を受ける者」で当行およびその主要な連結子法人等の業務の運営または財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当行の対象役員以外の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員で、対象従業員等に該当する者はありません。

#### (ア)「主要な連結子法人等」の範囲

主要な連結子法人等とは、銀行持株会社または銀行の連結総資産に対する当該子法人等の総資産の割合が2%を超えるものおよびグループ経営に重要な影響を与える連結子法人等であり、該当する会社はございません。

#### (イ)「高額の報酬等を受ける者」の範囲

「高額の報酬等を受ける者」とは、当行の有価証券報告書記載の「役員区分ごとの報酬の総額」を同記載の「対象となる役員の員数」により除すことで算出される「対象役職員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

#### (ウ)「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与えるもの」の範囲

「グループの業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与えるもの」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当行、当行グループ、主要な連結子法人等の業務の運営に相当程度の影響を与え、または取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

### (2) 対象役職員の報酬等の決定について

対象役職員の報酬等の決定について  
当行では、株主総会において役員全体の報酬限度額を決定しております。株主総会で決議された取締役の報酬の個人別の配分については、取締役会に一任されております。また、監査役の報酬の個人別の配分については、監査役の協議に一任されております。

### 2. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系の設計および運用の適切性の評価に関する事項

報酬等に関する方針について  
「対象役員」の報酬等に関する方針  
当行は、中長期的な企業価値の向上を通じて、「地域密着の徹底」という当行の経営方針にもとづいて役員報酬制度を設計しております。具体的な役員報酬制度といたしましては、役員報酬等の構成を、

- ・基本報酬
- ・賞与

としております。  
基本報酬は役員としての職務内容・人物評価・業務実績等を勘案し、賞与は、当行の業績を勘案して決定しております。

役員の報酬等は、株主総会において決議された役員報酬限度額の範囲内で取締役会にて決定しております。

なお、監査役の報酬については、株主総会において決議された役員報酬限度額の範囲内で、社外監査役を含む監査役の協議により決定しております。

### 3. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性ならびに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役職員の報酬等の決定に当たっては、株主総会で役員全体の報酬限度額が決議され、決定される仕組みになっております。

### 4. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の種類、支払総額および支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額  
(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

区分	人数	報酬等の総額 (百万円)					変動報酬の総額			退職慰労金	
		固定報酬の総額		変動報酬の総額			基本報酬	賞与	その他		
		基本報酬	ストックオプション	株式報酬型	その他						
対象役員 (除く社外役員)	11	97	84	84	—	—	4	—	4	—	8
対象従業員等	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(注) 1. 対象役職員の報酬等には、使用人としての賃金を含んでおります。

### 5. 当行（グループ）の対象役職員の報酬等の体系に関し、その他参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はございません。